



「受かる」と「受ける」

中学校三年の冬といえば、「受かる」と「受ける」という動詞がいろいろな場面で使われる時期。しかし、「受かる」と「受ける」という二つの動詞は、ちよつとめずらしい関係である。特に、「試験が受かる」という表現を聞いてちよつと違和感を感じる方はぜひ読んでください。

まず、日本語の動詞には、「戸が閉まる」と「戸を閉める」のような形の上での対応がよくある。「SIM-aru」と「SIM-eru」のよつにベースの部分(語根)が同じペアで、

戸が 閉まる

(人が) 戸を 閉める

のように、「が」「を」もそれに応じて対応する(「自動詞と他動詞の対応」という、あれです。はい)。

何らかの「変化」を表す動きの場合、この自動詞と他動詞は、「〜が」「〜を」という形に対応する。すなわち、「戸が閉まる」という自動詞表現での主語は、他動詞表現では、動きの対象(目的語)になる。例えば、

〜が折れる…〜を折る

〜が建つ…〜を建てる

〜が変わる…〜を変える

など、「〜」は同じ名詞で、それぞれ「が」「を」で対応する。

さてさて、このような対応を見たあとで、「受かる」「受ける」を見てみる。形としては、「Ukaru」「Ukeru」のようになっている。しかし、意外や意外！「が」「を」にはならないのです。

人が試験に受かる

人が試験を受ける

のように、どちらも主語は「人」のままなのです。もし、

試験が受かる

という表現が普通に言えるならば、普通の自他の対応ということになるのだけれど、あまり言わない。

つまり、「受かる」という動詞は、「受ける」に対して、自他の対応にはなっていないのです。

そこで、受験生へのエールを込めて、これら二つの動詞の関係を解釈してみる。

——「受かる」と「受ける」は形が似ていて、一見自動詞と他動詞の対応関係があるように見える。が、実は対応関係はない。いわば別の動詞。「受かる」と「受ける」とは全く別のことである。——うーむ、何の励ましにもならない？

そこで、改良版。——「受かる」という動詞は、「受ける」と同じく、「人」を主語とした動詞である。であるからして、「受ける」のも「人」ならば、その結果「受かる」のも、その「人」。あくまで「人」が主語。だから、がんばろう！

——わかったようなわからないようなところもあるが、これだと少しは励ましになる？

受験の季節は春を待つ寒い時期。受験生を送り出す先生方とともに、「受けた」結果が「受かった」となる「めでたい対応関係」を祈りたい。

